

コンパクト

イギリス 文学史

橋口 稔 編著

ARATAKE SHUPPAN

コンパクト

イギリス 文学史

橋口 稔編著

荒竹出版

著 者 略 歴

- 安東伸介（あんどう しんすけ）1932年生れ。慶応義塾大学教授。
 主要著訳書：N・コグヒル『チョーサー』（研究社）、「中世道徳劇—エ
 ヴリマン」（『中世文学選』グロリア・インターナショナル）。
- 小野寺健（おのでら たけし）1931年生れ。横浜市立大学教授。
 主要訳書：ロレンス『息子と恋人』（筑摩書房）、スパーク『マンデル
 バウム・ゲイト』（集英社）、マードック『赤と緑』（河出書房新社）。
- 小林 総（こばやし みのる）1929年生れ。津田塾大学教授。
 主要著訳書：『エリオット入門』（共著、南雲堂）、リーチ『悲劇』（研
 究社）。
- 高見幸郎（たかみ ゆきお）1930年生れ。津田塾大学教授。
 主要著訳書：『サマセット・モーム』（英潮社）、エミリー・ブロンテ
 『嵐が丘』（社会思想社）、グレアム・グリーン『現実的感覚』（早川書房）。
- 田村敏夫（たむら としお）1929年生れ。明治大学教授。
 主要訳書：エリック・ベントリー『近代演劇研究』（共訳、南雲堂）。
- 中野好之（なかの よしゆき）1931年生れ。国学院大学教授。
 主要著訳書：『評伝バーク』（みすず書房）、ボズウェル『サミュエ
 ル・ジョンソン伝』（みすず書房）。
- 橋口 総（はしぐち みのる）1930年生れ。東京大学教授。
 主要著訳書：『新しい詩を読む』（共著、研究社）、『イギリスの言語文
 化』（旺文社）、オーウェル『カタロニア讃歌』（筑摩書房）。
- 樋渡雅弘（ひわたし まさひろ）1931年生れ。千葉大学教授。
 主要著書：『形而上詩の諸問題』（共著、南雲堂）、『ミルトン研究』
 （共著、金星堂）、『ロマン派文学とその後』（共著、研究社）。
- 山内久明（やまのうち ひさあき）1934年生れ。東京大学助教授。
 主要著書：『The Search for Authenticity in Modern Japanese Litera-
 ture』（The Cambridge University Press, 1978）。

発行所

荒竹出版株式会社

印刷／製本

中央精版印刷

発行者

荒竹 勉

編著者

橋口 総

昭和五十八年一月二十五日
 昭和五十八年二月十五日

印刷
 初版

コ
 バ
 ク
 ト
 ニ
 イ
 ギ
 リ
 ス
 文
 学
 史

定価二五〇〇円

電 話 〇三—二六二—〇二〇二
 振 替（東京）二—一六七—一八七

郵便番号一〇一

東京都千代田区神田神保町二—四〇

（乱丁、落丁本はお取替えいたします）

ISBN4-87043-001-0

は し が き

文学史に求められているのは、文学の歴史について必要な知識を与えることであろう。知識はくわしいにこしたことがないかも知れないが、ほんとうに必要な知識は、それなりに整理されたものでなければなるまい。

イギリス文学の歴史は、千年あまりの長さを持っているのだから、かぎられたスペースの中に、必要な知識を整理して盛りこむのは容易なことではない。文学史もまた歴史である以上、当然のことながら、時代を追ってその流れをたどることになる。本書では、中世、十六世紀、十七世紀、十八世紀、十九世紀、二十世紀というふうに、大きく六部に分けたが、全体の分量からいうと、新しい時代のほうに重点を置いて、十八世紀までと十九世紀以降が、ほぼ同じ分量になっている。

つぎに、文学の歴史が避けてとおることのできない問題として、ジャンルの問題がある。文学史の中には、まず大きくジャンルに分けて、その上で時代の流れをたどっているものもある。本書では、中世をべつとして、それ以後の世紀では、各時代の中をまた小さく分けて、それぞれの章が、主として詩なり散文なり演劇なり小説なり批評なりを扱うようにした。もっとも、例外もあって、たとえば

十七世紀以降の演劇は、二十世紀をべつとして、便宜的に付け加えられる書き方になっている。それでも、詩なり小説なり演劇なり、それぞれの章をたどっていけば、それぞれ詩の歴史、小説の歴史、演劇の歴史という形になるはずである。

もう一つ文学史の問題として、古典主義、ロマン主義といった、文学思潮の問題がある。本書では、これらの主義にも、それぞれ一章を当てるようにした。もつとも、ビュリータニズムと自然主義では、同じイイズムでも、その概念はだいぶ違っている。

本書がおそらくこれまでのイギリス文学史と少し異なっているのは、十七世紀から十八世紀にかけての哲学者や歴史家に、二章をさいたことであろう。これらの人たちの著作に、散文文学としてのしかるべき位置を与えることが必要だと考えたからである。

全体が二十四の章に分けられることになったのは、いろいろ構成を整理した上で、結果的にそうなったにすぎず、格別の意味はない。本書は、大学で行なわれるイギリス文学史の講義のテキストとして使われることを考慮にいれて構想されている。一年間の授業が、それぞれ一章を一回づつ取り上げて行なわれることも可能であろうし、適宜一章が二回になることも可能であろう。中世の章と、シェイクスピアの章と、ロマン主義の章には、他の章よりも長いスペースがさかれており、当然内容的にも多くのことが含まれている。

本書は、大学の講義を意識にいれてもいるが、一般の読者に通読されるコンパクトな文学史ということも意識してつくられている。読みやすい文学史という観点から、引用は原則として避けることに

した。詩人、作家についての説明と、作品についての説明が、主要な部分となっているはずである。読める文学史を書くということは、決して容易なことではない。しかし、たんに文学辞典的な知識を与える本として利用されるだけでなく、通読されることも、編者の意図にはあったことを強調してこう。ただし、文学辞典的にも使用できるように、索引は充実させたつもりである。人物には、原語を付し、生歿年も付け加えてある。

つぎに、文学史を書くことのむずかしさの問題がある。全体の統一から言えば、一人で書くことが望ましいかも知れない。しかし、文学史の専門家というのがない以上、一人で書くことには当然、無理があり限界がある。文学史は、作品を必ずしも読んでいない、そしてこれからも読まないかも知れない読者のために書かれるのであるにしても、書く側が、それについて書く作品を読んでいなくてもよいということにはならない。きわめて数も多く、分量も多いイギリス文学の作品を、全部読むということは不可能であるし、また、文学作品であれば、義務としてただ読めばよいというものでもない。こうして、多くの文学史が、各時代なり、各ジャンルなりを専門とする複数の著者によって書かれるようになっていく。さらにまた、それぞれの作家を専門家に分担させる文学史講座も書かれていく。本書では、そのような講座の分担の仕方にも参考にしつつ、複数の著者に、それぞれ得意とする分野について書いていただくことにした。ただたんに、時代別で担当者を変えたり、ジャンル別に担当者を変えたりするのよりも、もう少し専門に対応する形になったはずである。

執筆の分担は、第一部を安東伸介氏、第二部の二、三と第三部の一を小林稔氏、第三部の二と第四

部の四を中野好之氏、第三部の四を樋渡雅弘氏、第四部の一、三、第五部の二、三、六を高見幸郎氏、第四部の二と第五部の一を山内久明氏、第六部の二、四、六を小野寺健氏、第六部の五を田村敏夫氏、残りは編者となっている。

イギリス文学は、私たちにとって、外国の文学である。イギリス人が書いたイギリス文学史が、すぐれた出来映えを示しているのは当然であるにしても、日本人の書くイギリス文学史が、イギリス人のイギリス文学史をお手本にしなければならないという理由はない。外国人の眼から見て書く文学史には、それなりの視点がなければならぬし、その結果として、それなりの価値が生れてくるはずである。わが国におけるイギリス文学研究は、すでに百年に近い歴史を持っているわけであるから、日本人の手になるイギリス文学史にも、それだけの蓄積がある。それらを踏まえた上で、また新しく書かれたこの「イギリス文学史」には、これまでのイギリス文学史にはない新しい面もあるはずである。

たまたま二十四の章に分けられることになったことにかこつけて言えば、この「イギリス文学史」が、「本朝廿四講」として多くの読者に読まれることを期待してやまない。

一九八三年一月

イギリス文学史

目次

はしがき iii

第一部 中世

一 中世の英文学

序論―古英語の文学・古英詩の特徴―古英詩の世界―古英語の散文―
中英語の文学・ノルマン征服以後の英文学―チョーサーとその時代―
十五世紀の英文学

5

第二部 十六世紀

一 近世英詩の夜明け

ジョン・スケルトン・トマス・ワイヤット―ヘンリー・ハワード―フ
イリップ・シドニー―エドマンド・スペンサー―シェイクスピアのソ
ネット集

33

二 近世散文の成立

トマス・モア―英語散文の成立―宗教改革と散文の発達―聖書の英訳
―散文ロマンス

三 演劇の隆盛

演劇の発達―劇場と劇団―大学才子たち―シェイクスピアの生涯―
作品年表―第一期・習作時代の作品―第二期・喜劇・史劇時代の作品
―第三期・悲劇・問題劇時代の作品―第四期・ロマンス劇時代の作品

第三部 十七世紀

一 形而上詩 付ジェイムズ朝演劇

ジョン・ダン―ジョージ・ハーバート―クラショ―とヴォーン―アン
ドル―・マーヴェル―ベン・ジョンソン―デッカー―とヘイウッド―チ
ヤップマン―とマーストン―フレッチャー―とポーモン―ジョン・ウエ
ブスター―シリル・ターナー―フィリップ・マッシンジャー―ジョン・
フォード

二 経験論哲学の系譜

フランシス・ 베이コン―トマス・ホップズ―ジョン・ロッキ―ジョー
ジ・バークリー―デイヴィッド・ヒューム

三 ピューリタニズムの文学

ジョン・ミルトン——ピューリタン革命——『失楽園』——ジョン・バニアン

117

四 古典主義詩 付 レストレイション演劇

ロバート・ヘリック——エドマンド・ウォラー——サミュエル・パトラ——ジョン・ドライデン——ウィリアム・ウィットチャリ——ウィリアム・コングリーヴ——リチャード・シェリダン

130

第四部 十八世紀

一 散文文学の展開

ステイールとアディソン——ジョナサン・スウィフト——ダニエル・デフォー

145

二 古典主義の継承と変質

アレグザンダー・ポープ——サミュエル・ジョンソン——トマス・グレイ——ウィリアム・コリンズ——クリストファー・スマー——トマス・チャタトン——ウィリアム・クーパー

161

三 近代小説の誕生 付十八世紀演劇

サミュエル・リチャードソン―ヘンリー・フィールディング―トバイアス・スモレット―ローレンス・スターン

四 散文精神の成熟

サミュエル・ジョンソン―エドマンド・バーク―エドワード・ギボン―ジェイムズ・ボズウェル―J・S・ミル―トマス・B・マコーリ―トマス・カーライル

第五部 十九世紀

一 ロマン主義

ウィリアム・ブレイク―ウィリアム・ワーズワス―S・T・コールリッジ―バイロン―P・B・シェリー―ジョン・キーツ

二 ロマンズから近代小説へ

ホレス・ウォルポール―アン・ラドクリフ―ジェイン・オースティン―ウォルター・スコット

三 近代小説の展開

シャルズ・ディケンズ―W・M・サツカレー―ブロンテ姉妹―ギヤ
スケル夫人―アントニー・トロロープ―ジョージ・エリオット

245

四 ヴィクトリア朝詩

アルフレッド・テニソン―ロバート・ブラウニング―マシュー・アー
ノルド―D・G・ロセツティ―スウィンバーン―G・M・ホプキンズ

262

五 ヴィクトリア朝の批評

ジョン・ラスキン―マシュー・アーノルド―ジョン・ヘンリー・ニュー
マン―ウィリアム・モリス―ウォルター・ペイター

276

六 自然主義小説

ジョージ・メレディス―ジョージ・ギッシング―ジョージ・ムア―
ラディヤード・キプリング―R・L・ステイヴンソン―サミュエル・
バトラ―トマス・ハーディー

290

第六部 二十世紀

一 現代への谷間

オスカ―・ワイルド―ヘブルームズベリー・グループ―レズリー・
ステイ―ヴン―リットン・ストレイチー

309

二 二十世紀初頭の小説

ジョン・ゴールズワージー―アーノルド・ベネット―H・G・ウェル
ズ―ジョーゼフ・コンラッド―E・M・フォースター―D・H・ロレ
ンス―ヴァーヂニア・ウルフ―ジェイムズ・ジョイス―オルダス・ハ
ックスリー

323

三 現代詩におけるモダニズムと伝統

ヘジョーシ朝詩―T・S・エリオット―W・H・オーデン―ディラン・
トマス―ヘム―ヴメント―テッド・ヒューズ

340

四 批評の自立と発展

T・E・ヒューム―T・S・エリオット―I・A・リチャーズ―ウィ
リアム・エンブソン―F・R・リーヴィス―ジョージ・オーウェル―

355

レイモンド・ウィリアムズーリチャード・ホガートーコリン・ウィルソン

五 現代演劇

近代劇の始まりーバーナード・ショーーイェイツとアイルランド国民演劇運動ー風習喜劇の伝統ーノエル・カワードーエリオットと詩劇ークリストファー・フライーテレンス・ラティガンー新しい波ージョン・オズボーンーアーノルド・ウェスカーーアーデンーピンターーペケットー第二の波

六 現代の小説

イーヴリン・ウォーーグレアム・グリーンージョージ・オーウェルーC・P・スノウーアントニー・ボウエルー大戦後の小説家

索引

434

パ
ク
ト
ン
イ
ギ
リ
ス
文
学
史

第一部 中世